

東京都の葬儀の流れ

葬儀準備

逝去

・危篤 → 臨終 → 死亡診断 → 清拭

搬送

・霊安室へ移動 → 葬儀社&安置場所の決定
・死亡診断書の受理 → 寝台車で安置場所まで搬送

安置

・安置と遺体の冷却保全
・各方面への連絡

日程決定

・式場の決定
・菩提寺への連絡と葬儀日程の調整 → 式場と火葬場の予約

死亡届

・死亡届の記載

内容決定

・葬儀内容の打合せ → 訃報の作成
・死亡届の提出

葬儀当日

納棺

- ・ 故人の身支度を整える
- ・ 納棺の儀

通夜

- ・ 式場の確認（祭壇・供花芳名・礼状・返礼品等の確認）
- ・ 通夜の儀式
- ・ 通夜振る舞い（会食）

葬儀

- ・ 葬儀
- ・ 告別式（お花入れ）
- ・ 出棺

火葬

- ・ 火葬場への移動
- ・ 荼毘（火葬）
- ・ 収骨

お斎

- ・ 式場への移動
- ・ 初七日法要（繰り上げ初七日）
- ・ お斎（精進落とし）

後飾り

- ・ 自宅にお骨を祀る

逝去

危篤

入院・入居の場合

終末期に入ったなら、危篤の連絡には、いつでも対応ができるよう、心づもりをしておきましょう。

高齢の場合、危篤の連絡は1度ではなく2~3回繰り返される場合があります。

入院先などからご危篤の連絡があったなら、慌てずに向かいましょう。

事前に24時間有効なアクセスを十分に確認しておいて下さい。

また、臨終に間に合わないようなときは、心の中で声をかけて下さい。きっとお声は届きます。

自宅の場合

慌てず、お声をかけながらお側で見守って下さい。

高齢の場合には、救急車を呼ぶかどうかについてなど、終末期の意思決定を家族内で話し合っておくことが望ましいです。

在宅医に一報入れましょう。

臨終・死亡診断・清拭

入院・入居の場合

臨終を迎えた後、医師による死亡診断が行われ、看護師がお身体の死後処置*1を行います。

(終末期になると病院から逝去時のお着せ替えのお洋服を持参するように言われますので、用意しておきます。)この間席を外すように言われることが多いので、その間に家族に逝去の連絡を行い、依頼する葬儀社へ第一報を入れます。

清拭が終了したら、病院側におよその退院時間を尋ねて葬儀社に伝えて下さい。

自宅の場合

在宅医療を受けていた場合

自宅で逝去を迎えた場合は、在宅医・かかりつけ医に連絡をします。

在宅医には、終末期に入ったら24時間連絡がつくようにしておきます。

在宅医による死亡診断が行われたら、訪問看護師が死後処置を行います。

帰院後に「死亡診断書」が作成されますので、後ほど受け取ります。

葬儀社に連絡をし、まずは遺体をドライアイスなどで冷却し、遺体保全*2してもらいます。

各方面へ逝去の連絡を行い、「葬儀に関しては後ほどご連絡を致します」と、伝えます。

急死の場合（予期せぬ死）

在宅医・かかりつけ医がいない場合には、救急車を呼びます。

死後数日経過していて、死亡が明らかな場合には、110番通報をします。

病院到着後、医師による死亡確認が行われます。

このとき死因の特定の為に、行政解剖*³が行われる場合があります。

もしも、事件性が疑われる場合には検視官が検視を行い、状況次第では司法解剖*⁴が行われることがあります。

東京都内の3次救急病院などは、病院に検視官が出向いて検視を行います。

自宅で死亡確認が行われた場合には、遺体は管轄の警察署へ移送され、検視を受けますが、死因の特定が困難な場合、または事件性が疑われる場合には、大塚の医務院もしくは法医学教室のある大学病院に移送され、司法解剖が行われる場合があります。

この場合、死亡診断書ではなく検案を行った医師により「死体検案書」が出されます。

検案後、検案内容についての説明がありますので、終了時間に合わせて、検案を受けている機関で待機します。

その後医務院の搬送車もしくは葬儀社が手配した寝台車で安置場所に搬送致します。

警察署で検案を受ける場合には、棺に納めて搬送を行う場合がありますので、葬儀社に棺を用意してもらいます。

- *¹ 死後処置 酸素マスク・点滴の管などの挿管物を抜去し、清拭、着替えなどを行う。エンジェルケアとも呼ばれ、患者に対する最後の手当と言える。ただし、目や口を閉じるなど顔の補正は葬儀社の納棺師が行う。
- *² 遺体保全 火葬まで遺体の尊厳を守り、生前の姿のまま保全するため、できるだけ早く保湿と冷却を行う。冷却は主にドライアイスを用いる。体重 60kg前後に対して1日に10kgのドライアイスが必要。身体が大きい場合には 15 kg～20kgが必要になる。冷蔵保管の場合は、最初に10kg入れた後は2～3日おきに追加する。
- *³ 行政解剖 事件性は無いと判断された遺体の死因究明を目的として行われ、遺族の承諾を必要としない。行政解剖を行えるのは監察医のみ。監察医が置かれているのは、東京 23 区・大阪市・横浜市・名古屋市・神戸市。その他の地域では、法医学者によって解剖が行われる。
- *⁴ 司法解剖 検視または検案によって、犯罪性があると判断された場合、またはその疑いのある場合に刑事訴訟法に基づいて、死因の究明や犯罪の立証を行うための解剖。遺族の承諾は必要とされない。

搬送

霊安室への移動

死後処置が行われると、遺体は病室から病院の霊安室に運ばれます。(病院の状況によっては病室で待つこともあります。)この時、病室内にある私物は全て持ち帰ります。

霊安室で滞在できるのは通常2~3時間ほどですので、速やかに死亡による退院を行います。退院による病院費の清算は1週間程度後に行うのが通常です。請求書が送られてくる場合は振込ができますが、後日病院へ支払に行くことが多いです。

葬儀社と安置場所の決定

霊安室に安置後は、搬送の手はずを整えなければなりませんので、安置先と葬儀社を決める必要があります。

自宅に帰れる場合は自宅に安置しますが、帰れない場合には安置施設を利用します。

安置先が決まったら葬儀社に連絡し、遺体専用の寝台車で搬送してもらい、安置します。

葬儀を依頼する葬儀社に搬送から頼む方が遺体管理上は安心できますが、依頼する葬儀社を決めていない場合には、病院から勧められた葬儀社に一旦ご自宅まで遺体搬送だけを依頼することもできます。搬送だけを依頼できるのは、ご自宅へ帰れる場合だけです。ドライアイスでの冷却処置をしてもらえば、葬儀社を決めるまでに24時間程度の猶予ができます

死亡診断書の受理

「死亡診断書」を受け取り退院となります。まれに、死亡診断書の発行が翌日以降になることがあります。死亡診断書がない場合には、死亡届の提出ができない為、火葬許可書が受理できません。発行が遅れる場合には明確な発行予定日を確認の上、葬儀の日取りを決めます。

また、検案を受けた場合には、検案を行った医師から「死体検案書」が発行されます。

左側には、死亡届の記載欄があります。葬儀社に書き方を教わりながら記載すると間違いがありません。死亡届は逝去から7日以内に死亡地・本籍地・提出人の住所地に提出します。葬儀社にお願いすると代行してくれます。

安置場所までの遺体搬送

防水シートに包み、遺体搬送用の寝台車で安置場所まで移動します。ごくまれに、自家用車などで移動させられるかという質問が出る場合がありますが、移動中に体液の流出が起きることもありますので、お勧めできません。

安置

安置と遺体の冷却保全

安置とは、臨終から葬儀の日まで遺体を寝かせ保管しておくことを言います。病院の霊安室で遺体を安置しておける時間は僅か2時間ほどです。葬儀のことを考えるより、先ず故人が眠る場所である安置場所を決めなければなりません。

安置期間は通夜葬儀を行うための準備時間であると同時に、ご家族にとっては大切な弔いの時間でもあります。共に過ごせる時間には限りがありますので、できる限りお側で過ごされると良いでしょう。ご親族などからのお参りも大切になさってください。

自宅の場合

部屋全体を可能な限り冷やし、北枕もしくは西枕にして、故人が使っていた寝具に寝かせます。ベッドでも構いません。

保管費用が掛からないと思われがちですが、遺体保全の為に、ドライアイスによる冷却管理が必要ですので、期間に応じたドライアイス処置代金が掛かります。葬儀を依頼する葬儀社が、毎日ドライアスを充てに来て、お身体の状態を確認致します。

遺体の保管には、一度で約10キロのドライアイスが使われます。ドライアイスは固形二酸化炭素です。時間と共に二酸化炭素が室内に充満しますので、二酸化炭素中毒を起こさないように、十分に換気を行いましょ。また、納棺していない場合には、同室で眠るのは避けましょ。

自宅での安置が長期になる場合は、途中で冷蔵施設のある安置施設の利用も考えた方が良いでしょう。

安置施設の場合

遺体の保全には、全身を冷却するのが理想です。安置施設の多くは全身冷却ができますので、よりよい状態で保全ができます。都内には、おおまかに分けて4タイプの安置施設があります。施設によって面会対応が大きく異なり、面会ができる施設とできない施設があります。また、24時間付き添える安置施設は非常に少ないので、付き添い希望の場合は、事前に確認しておく必要があります。

主だった都内の安置施設

- ・ 斎場併設の安置施設
- ・ 葬儀社の安置施設
- ・ 貸し式場併設の安置施設
- ・ 霊柩自動車会社の安置施設

日程決定

式場の決定

日程を決めるためには、以下の4点を検討し、まずは葬儀式場を決めます。

- ① 規模 全体の参列人数
- ② 場所 葬儀を執り行う場所(式場)を決めます
- ③ 予算 総費用の希望額
- ④ 形式 葬儀の形式 仏式・神式・無宗教などを決めます。

この時埋葬先と宗派の確認をしておきます。

菩提寺への連絡と葬儀日程の調整

葬儀の日程は、①菩提寺の予定 ②式場の予定 ③火葬場の予定この3点が合致するように、葬儀社が日程の調整を行います。菩提寺がある場合には、菩提寺の予定が最優先されます。

式場と火葬場の予約

日程の調整が行われたなら、式場を火葬場の予約を行います。

死亡届

日程が決まったら、死亡届の記載を行います。

必要な情報と、提出用の印鑑(三文判で良いが、シャチハタは不可・提出者の葬儀社に預ける)

記載に必要な情報

故人：本籍地・住民票がある住所・戸籍の筆頭者

提出人：本籍地・住民票がある住所・戸籍の筆頭者

葬儀社の担当にガイドしてもらいながら記載すると間違いがありません。

役所への提出は、大概において葬儀社が代行してくれます

内容決定

葬儀内容の打合せ

葬儀内容についての打合せは、おおまかに2つに分かれます。

葬儀に必要な商品を選ぶ

棺・祭壇・骨壺・返礼品(香典返し) 遺影写真・料理・霊柩車など

どのような時間を過ごすのかを決める

湯灌を行う・家族そろって納棺を執り行う・思い出のスライドショーを見る・好きだった音楽をかける・生前の活躍を偲べる思い出コーナーを作成するなど、100人いたら100通りの弔いがあります。演出的なことが大事な人・しっとりと共に過ごすのが大事な人など様々です。

たった一つの、たった一度の人生最後の時間ですので、一度の打合せで決まらなくても焦ず、じっくりと考えて、かけがえのない時間を大切に過ごして下さい。

訃報の作成と連絡

葬儀の日程とおおまかな内容が決まったところで、親族や故人と親しかった友人・知人、職場などに訃報を伝えます。葬儀の案内は、葬儀社に日程を含めた訃報を作成してもらい、間違えないように伝えます。電話連絡が多いですが、FAX・line・メール・メッセージなど活用すると便利です。故人の逝去を伝え、生前のご厚情に感謝を述べて、葬儀の案内を行きましょう。

納棺

故人の身支度を整える

納棺を執り行う前に、故人の身支度を整えます。葬儀というのは人生の卒業式です。お身体を清め、装束もしくは愛用の服に着替え、お顔を整えます。東京には優秀な納棺師が多数いますので、死化粧だけでなく、口を閉じる・目を閉じる・皮膚の変色をカバーする・傷跡をカバーする、損傷がある場合にも対応ができます。お仕度を十分に整えることが、家族が最後にできるお世話と言えるでしょう。

湯灌を行う場合にも、故人のプライバシーに配慮しながら行いますので是非立ち会って、大事な時間を過ごして下さい。

納棺の儀

納棺の儀式は、故人が今生からの旅立ちの為に棺という船に乗る時です。出来るだけ家族が揃い立ち会うのが望ましいでしょう。

通夜

故人と縁を結んだ親しい人が集まって、思い出を語り合う大事な時間です。
儀式の有無にかかわらず、是非最後の夜を共に過ごされてください。

式場の確認

喪主は、開式の1時間半前には式場に到着し、依頼内容と間違えないか確認します。
確認事項は多いですが、葬儀担当者がつきっきりでお世話してくれますので、安心してください。

確認事項

- ① 祭壇の色や形
- ② 供花芳名札の芳名の記載に間違えないか
- ③ 供花芳名札の掲載順番を決める
- ④ 礼状の住所名前などに間違えないか
- ⑤ 返礼品に間違えないか
- ⑥ 受付の確認
- ⑦ 座席の確認
- ⑧ 司会者との最終確認
- ⑨ 僧侶への挨拶
- ⑩ 弔電の確認（通夜の儀の後でゆっくり行います）

通夜の儀式

開式の10分前には、式場に着席します。
読経中は故人を偲び、心の中でお話しなさってください。
読経時間は宗派によって前後しますが、およそ35分～60分です。

式の流れ



司会者より着席の案内が入ったら、式場に着席します。

導師(僧侶)入場の案内が入りますので、低頭して導師を迎えます。

宗派にもよりますが、開式から10分~20分ぐらいで司会者から焼香*5の案内が入ります。

喪主より始め、遺族・親族・会葬客と縁の強い順に行います。

読経終了後、導師から戒名(法名)のご説明と法話を賜ることがありますので、心静かにお話を耳を傾けて下さい。

導師退場後に司会者より閉式が行われ、儀式は終了になります。

閉式前に、喪主から挨拶をすることもあります。

故人の顔を見てから、通夜振る舞いの席に移動します。

***4焼香** 宗派によって焼香の回数が異なりますので、参考にしてください。

1.焼香台の少し手前で遺族と僧侶に一礼。焼香台の前に進み、一礼。

2.数珠を左手にかける。右手で抹香をつまみ、額におしいただく。

3.抹香を静かに香炉の炭の上にくべる。

4.合掌後、少し下がり遺族に一礼して席に戻る。

宗派	回数	焼香の作法
天台宗	1~3	右手の3本の指で抹香をつまみ、額に押しいただき、香炉にくべる
真言宗	3	右手の3本の指で抹香をつまみ、左手を軽く添え、額に押しいただき、香炉にくべることを3回繰り返す
浄土宗	決まり無し	右手の3本の指で抹香をつまみ、手のひらを仰向け、左手を添えて額に押しいただき、香炉にくべ、合掌し礼拝
臨済宗	1	右手の3本の指で抹香をつまみ、左手を添え、顔の高に押しいただき、香炉にくべる
曹洞宗	1.5	1回目は右手の3本の指で抹香をつまみ、左手を軽く添え、額の高さに押しいただき、香炉にくべる
		2回目は少しだけ抹香を取り押しただかずに香炉にくべる
日蓮宗	3	右手の親指と人差し指で抹香をつまみ、静かに香炉にくべる。香炉にくべることを3回繰り返す
浄土真宗本願寺派	1	抹香を押しただかずに香炉にくべる
真宗大谷派	2	抹香を押しただかずに香炉にくべる
創価学会	3	右手の3本の指で抹香をつまみ、左手を軽く添え、額に押しいただき、香炉にくべることを3回繰り返す

通夜振る舞い(会食)

通夜の儀式終了後には、参列した弔問客、お手伝いの方々にお食事を用意し、故人に代わって、生前のお付き合いへのお礼を伝えます。故人を偲ぶ時間であると共に、世代交代した遺族から今後のお付き合いをお願いする場でもあります。

また、久しぶりに親族が揃い、孫も一堂に会しますので、祖父母との思い出を語り合い、家族のルーツを尋ねるのも、良い時間になるのではないのでしょうか

葬儀

葬儀

火葬の時間から逆算して開式時間が決まります。喪主は開式の1時間前には式場に到着し、参列者の到着を待ちます。儀式の時間は約1時間です。

宗派によって、僧侶によって読経時間は異なりますが、概ね35分～50分程度です。



告別式

閉式後式場内に供えられたお花を切って、お別れの準備を始めます。お別れの支度は10分程で整いますので、その間に遺族は出棺の支度を整えます。遺族・親族からお別れのお花入れを行います。参列者全員がお別れのお花入れを行った後に、棺のふたを閉めます。閉棺後、遺族親族を代表して、喪主があいさつを行い火葬場に向けて出棺致します。この時、遺族は白木の位牌・遺影写真を抱き、喪主の左右に立ちます。

出棺

親族の男性もしくは親しい方々にお手伝いをして頂き、柩を霊柩車に乗せます。

火葬

火葬場への移動

出棺後は火葬場へ移動します。霊柩車には喪主が同乗し、同行する親族・参列者は、マイクロバスなどの指定の車へ乗り、同行なさらない方は、式場前からお見送りいただきます。

自家用車で斎場へ移動する場合は、霊柩車と離れないようにしてください。斎場に到着するのが同時でない場合には、到着できなくても火葬炉に納めなければならないこともあります。

火葬

火葬場に到着したなら火葬炉前まで進み最後の対面を行います。2~3分ほどのお時間ですが、ここが本当に最後の対面になりますので、全員しっかり会いましょう。その後棺は火葬炉の中に納められ、扉が閉まります。その後僧侶の読経の中火葬炉前で焼香を行い、控室に移動します。火葬が終わるまでの1時間前後を控室で過ごしますので、僧侶が同行していたなら、この時に49日法要の相談をしておきましょう。また、待ち時間の間にお手洗いを済ませます。

収骨

収骨の案内が入りましたなら火葬炉前に戻り、骨壺に遺骨を納める、お骨上げを行います。二人一組になり(浄土真宗は、一人で行う)遺骨を骨壺の中に、足元から順番に納めて行きます。最後に頭部のお骨を納め、喉仏を納めます。

お斎

式場への移動

収骨後は、骨壺・白木の位牌・遺影写真を抱き、指定の車で式場に戻ります。

初七日法要(繰り上げ初七日)

式場に戻り、初七日法要を執り行います。都合により、初七日法要は葬儀の読経の後(火葬の前)に続けて行うこともあります。

おとき お斎

葬儀終了後のお斎の席は(精進落とし)故人に寄せていただいたご厚情へ感謝の意を込めてふるまう大事な会食です。遺族側にとっては、今後のお付き合いをお願いする場でもあります。高額なお食事を用意する必要はありませんが、心を込めてご接待致します。葬儀の日は長時間にお付き合いいただきますので、会食は1時間程度で済ませ、全員をお見送りして終了になります。遺骨・お写真・白木の位牌を持って帰宅します。

後飾り

後飾り祭壇について

火葬後、自宅に帰ってから遺骨を安置する祭壇を、後飾り祭壇（仏法では中陰棚）と言います。遺骨を埋葬するまでの期間に利用する仮の祭壇です。2段～3段で、白木製の物が多いですが、中には漆塗りの立派な後飾り祭壇もあります。白瀬戸の仮の仏具と一緒に葬儀社に依頼して用意してもらいましょう。

祭壇の設置場所

1畳強のスペースが必要になりますので、葬儀の前に室内を片付けて、準備をしておくこと火葬後に困りません。

仏壇がある場合には仏壇の脇に置きます。仏壇がない場合には、室内の北側もしくは、西側に設置しますが、納骨までの期間はお参りのお客様もありますので、お客様を通しやすい場所に設置すると良いでしょう。

最近では、住宅事情からサイドボードやローチェストの上に安置することもあります。

祭壇の飾り方

上段のセンターに白木の位牌

左右に、遺影写真と骨壺を安置します。

下段のセンターには仏具を設置します。

仏具の左右に供物を供えと良いでしょう。

3段の場合は中段に供物を供えます。

後飾り祭壇に遺骨を安置したら、グラスにお水を入れて

供え、お線香を焚き、手を合わせます。

葬儀は遺族にとっては大変なことです、故人にとっても大変なことです。御霊に「お帰りなさい」と声をかけて下さいね。

中陰の供養に関して

毎日のご供養はお水とお供物（家族の朝食のおすそ分けで大丈夫です）をお供えして、手を合わせます。お菓子や果物などのお供物は賞味期限が切れる前に家族で食べましょう。

お花は毎日お水を変えると、長持ちします。



ご供養は、亡き人へのラブコールです。大好きだよというお気持ちを込めて行えば、ルールに縛られる必要はありません。

後段の始末

納骨後の後段は保存しておき、お盆飾りの時に利用すると便利です。

飯の仏具は燃えないゴミに出せば大丈夫です。葬儀社が回収してくれる場合もあります。

白木位牌は、本位牌に御霊を移す儀式のあと、お寺さんにお渡しして、お焚き上げをして頂きましょう。